

第9回 音楽の中心核②

前回までにて、通常の音楽システムにて使われる「コード&スケール」全18本を説明しました。特に、コード進行にて、最も基本的な「Diatonic dominant motion」から「Perfect dominant motion」そして、一般的な「Dominant motion」と、4度進行の重要性はEtudeの実践例にて理解していただけたかと思います。

また、Advanced chord progressionにてはドミナントコードが非常によく使われます。ドミナントコードは、それ単体で、最もDominant motionを誘発しやすい性格のコードでこれらの実践に不可欠な存在です。さらに、ドミナントコードは5thの種類によって、またテンションの付き方によって、多種多様のスケールが対応しとても複雑です。まずは「ドミナントコード」を整理しましょう。

ドミナントコードの対応スケール

まず、5thを考慮しない、ドミナントコード定義の形では7つのスケールが対応します。

$$\boxed{\text{ドミナントコード}} = R + \boxed{M3} + \quad + \boxed{m7}$$

Mixo-Lydian (Maj.V)

Lydian7th (r.mIV)

Altered (r.mVII)

Mixo-Lydian $\flat 6$ (r.mV)

Harmonic minor P5th below (特殊)

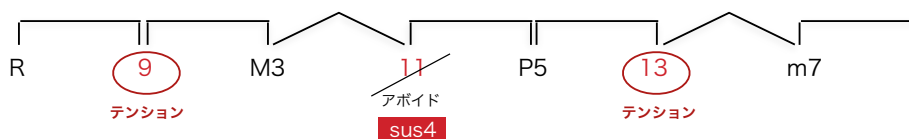
Combination of diminished (特殊)

Whole tone (特殊)

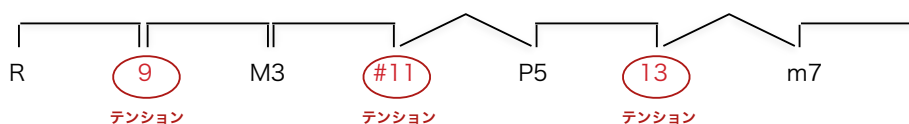
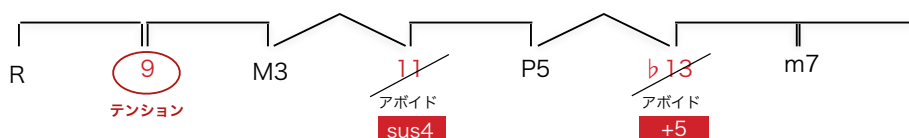
Major scaleでは、Vの「Mixo-Lydian」しか対応していなかったものが、Real minor scaleからは「Lydian7th」「Altered」「Mixo-Lydian $\flat 6$ 」の3つ、そして、ダイアトニックスケール以外の特殊系スケールからは「Harmonic minor P5th below」「Combination of diminished」「Whole tone」の3つ、計7種類のスケールが対応します。

ドミナントコード対応の7つのスケール一覧

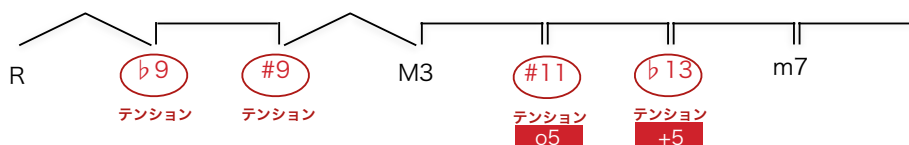
Mixo-Lydian (Maj.V)



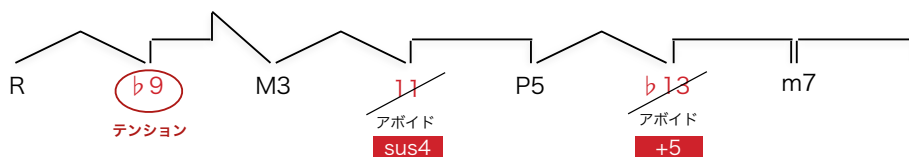
Lydian7th (r.mIV)

Mixo-Lydian \flat 6 (r.mV)

Altered (r.mVII)



Harmonic minor P5th below (特殊)



Combination of diminished (特殊)



Whole tone (特殊)



ドミナントコード基本形別の対応スケール

5thによる分類をします。



Mixo-Lydian
 Lydian7th
 Mixo-Lydian ♭6
 Harmonic minor P5th below
 Combination of diminished

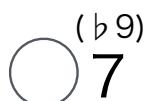


Lydian7th
 Altered
 Combination of diminished
 Whole tone



Altered
 Harmonic minor P5th below
 Mixo-Lydian ♭6
 Whole tone

詳細なテンション別の対応スケール一覧



Harmonic minor P5th below
 Combination of diminished



Mixo-Lydian
 Lydian7th
 Mixo-Lydian ♭6



Combination of diminished



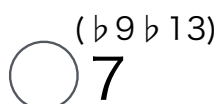
Combination of diminished
 Altered



Lydian7th
 * Whole tone (5th omit)

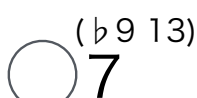


Combination of diminished
 Altered



Altered

*Harmonic minor P5th below
 あまり使わない



Combination of diminished



Mixo-Lydian
 Lydian7th



Altered

全ルートにおける全コードファンクション①

これまでに、コード進行はすべて説明してきましたが、さらに、応用的なコード進行テクニックを得るために、D7C以外にも、全てのコードにファンクションを定義します。これを覚えることにより、借用やセカンダリー・ドミナントコードを始めとした、応用コード全てに対し「現キーから見たファンクション」を確定させることができます。これにより、究極のコード進行を自在に操れるようになります。

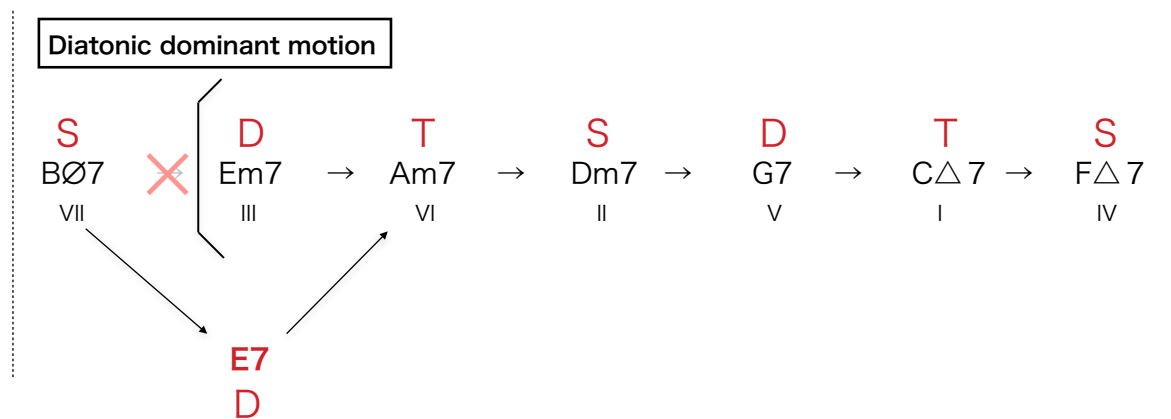
Diatonic dominant motionからの拡張

まず基本に戻ってD7Cのコードファンクションを確認します。

Diatonic 7th chordのFunction

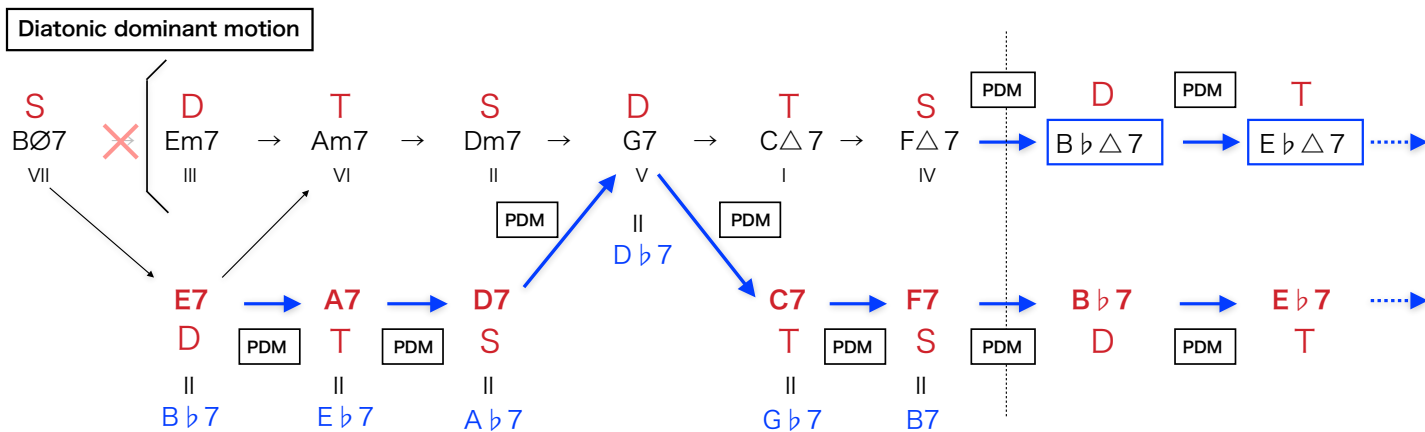
I $\Delta 7$	II m7	III m7	IV $\Delta 7$	V 7	VI m7	VII $\emptyset 7$
T	SD	DT	S	D	TS	SD
		(III7 = D)				

：CにおけるDiatonic dominant motionにてD7Cのプライマリーファンクションをみます。



各ファンクションを見てみると綺麗に「T→S→D→T→・・・」と循環しているのが分かります。実はドミナントモーションとは「確実に次のファンクションへと進行させる」と別定義できます。

Diatonic dominant motionは、あくまでもD7Cのみの進行なので、「F△7」からP4先の「B♭△7」へは進めません。しかし、Perfect dominant motionならば進むことができます。マクロ的に転調していなければ、「B♭△7」は：Cで使われる「VII♭△7」です。そして、このファンクションはSubdominantから進みDominantとなります。Perfect dominant motionはあらゆるコードクオリティで使えるので、III7であるE7からも連続して適応させられます。



さらにドミナントコードは代理コードを持てます。この代理コードは全く等価値のコードとなるので当然ファンクションも同じになります。

(E7=B♭7=Dominant A7=E♭7=Tonic・・・)

この連続で全ルートでのドミナントコードのファンクションを確定できます。さらにこれらは△7コードでも、メジャーコード系全てのコードクオリティでも同じ結果となります。

	C	D♭	D	E♭	E	F	G♭	G	A♭	A	B♭	B	C
メジャー系コード トライアド 6 7系 △7系	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T	D	S	T
マイナー系コード トライアド m7 ø7 o7 m△7	TS	DT	SD	TS	DT	SD	TS	DT	SD	TS	DT	SD	TS

マイナーコードは「次のファンクションを先取りして2つ同時に持てる」ので下段の結果となります。